

聖書箇所: ヨシュア記 14 章

説教題: 主がともにいてくだされば

日時: 2010 年 7 月 25 日

今日の章からヨルダン川西側の土地の割り当てが始まります。まず 1～5 節は前置きです。この作業に直接関わったのは祭司エルアザルとヌンの子ヨシュアとイスラエル人の部族の一族のかしらたちでした。祭司エルアザルはアロンの第三子です。彼がこの作業に関わることは、モーセの時代に主によって命じられていました。その彼と、ヨシュアと、イスラエルの部族のそれぞれの代表が集まってくじを引きます。箴言 16 章 33 節に「くじは、ひざに投げられるが、そのすべての決定は、主から来る。」とありますように、これは主の御心を伺う方法であり、この土地分割を決定する方法として主が前もって指定しておられたものでした。こうしてこれから 9 部族と半部族に相続地が割り当てられます。なぜイスラエルは 12 部族であるはずなのに、9 部族半なのかという説明が 3 節以降です。すでに 13 章で見ましたように、ヨルダン川東側に 2 部族と半部族は自分たちの相続地を得ていました。またレビ族はイスラエルの各地に散って礼拝生活を助けるため、自分たちの相続地は持たないこともモーセの時代に決まっていた。計算の早い人は、12 部族から 2 部族半を引き、さらにレビ族を引けば、残りは 8 部族半になるはずではないかと思うかもしれません。それに対して 4 節にヨセフ族はその子どもであるマナセとエフライムの 2 部族になっていたとあります。この経緯については創世記 48 章 5 節にあります。こうしてこれからヨルダン川西側に 9 部族と半部族の土地の割り当てがなされて行くわけです。

さてまず登場して来たのは、6 節にあるようにユダ族です。しかし続けて読むと分かりますように、そのユダ族よりも先に、カレブ個人の相続地のことがここで記されます。このカレブは 40 年前に約束の地を探るためにカデシュ・バルネアからモーセによって遣わされたイスラエルの 12 人の斥候たちの中の一人です。詳しくは民数記 13～14 章に記されています。あの時、偵察から帰って来た 12 人の内、10 人は、「その地は乳と蜜の流れる素晴らしい地です！」と報告しつつも、「私たちはそこに攻め上れない！」と言いました。「その地に住む民は力強く、私たちはそこで背の高いネフィリム人、アナク人を見た。私たちには自分がいなごのように見えたし、彼らにもそう見えたことだろう！」と言って、民の心をくじきました。そんな中、このカレブが声をあげて「私たちはぜひとも、上って行って、そこを占領しよう。必ずそれができるから。」と言いました。そしてヨシュアと共に二人で「主にそむいてはならない。・主が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。」と言いました。しかしイスラエルの民は、先の 10 人の斥候たちの不信仰の発言に従ったために、40 年間荒野をさまよわなければならなくなりました。そして当時 20 歳以上の者はみな荒野で倒れ死ぬこと、一人も約束の地に入れないこと、しかしこのヨシュアとカレブだけは約束の地に入ってその地を所有することができる、と主に言われていました。カレブは 6～9 節で、その過去の出来事と主の約束を振り返っています。そしてついにその約束の成就の時が来たことを見て取って、ここで前に出て来たのです。

この彼の言葉からいくつかのことを心に留めたいと思います。まず彼はこの約束の成就まで 45 年間待ちました。10 節:「今、ご覧のとおり、主がこのことばをモーセに告げられた時からこのかた、イスラエルが荒野を歩いた 45 年間、主は約束されたとおりに、私を生きながらえさせてくださいました。今や私は、きょうでもう 85 歳になります。」カレブがカデシュ・バルネアから遣わされた時は 40 歳で

した。約束の地の目の前まで来ていたのに、イスラエルの不信仰のゆえに、それから40年間の荒野の旅を強いられました。そしてこの地での戦いに約5年かかったということなのでしょう。今や85歳になっていました。興味深いことは、民数記13～14章の事件以後、カレブの発言や行動は今日の箇所まで一切、聖書に登場して来ないことです。いわば彼は舞台の背後に退いていた。しかしこの45年を経た約束の成就の時になって、彼は第一番目に前に出て来たのです。これはいかに彼がこの日を熱望してこれまで歩いて来たか、ということを示唆しているでしょう。荒野の旅の中では幾度となく、その希望も消えかかりそうな時もあったでしょう。しかし彼はここまで歩いて来たのです。それに比べて私たちはすぐに成果や結果が出ないと苛立ちやすいものです。祈ってすぐ導きを与えられないと、不満を述べ、大声で騒ぎ、失望して、約束を投げ捨ててしまう。そんな私たちは改めて、カレブは45年待ち続けたということを感じるべきではないでしょうか。このような忍耐を伴う信仰に私たちも召されていることを覚えるべきではないでしょうか。

そしてここには約束に真実であられた主の姿が証しされています。10節でカレブは、主は約束通りにこの日に至るまで私の命を守って下さった、と主をほめたたえています。荒野の旅においては次々に仲間が死んで行きました。同世代はヨシュア以外誰もいなくなりました。そしてこの地に入っても、いつ戦いで命を落とすか分からない危険の中がありました。しかし主はこの日まで私を生きながらえさせ、今、相続地を与えて下さる。主はこのように約束を必ず果たされるお方です。長い間、待たされても、主に信頼する歩みがむなしく終わることは決してない。ですから私たちは恐れずに主に信頼を置いて歩いて行って良いのです。

そして驚くべきは、彼が私は今も壮健です！と語っていることです。11節：「しかも、モーセが私を遣わした日のように、今も壮健です。私の今の力は、あの時の力と同様、戦争にも、また日常の出入りにも耐えるのです。」カレブは今や85歳となっているのに、40歳の時と同じように壮健であるとは異常です。しかしそんなカレブを思い浮かべる時に思い起こされる御言葉はイザヤ書40章30～31節です。「若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかけて上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」主により頼み、主との正しい関係に生きる人は、驚くべき力、驚くべき活力を供給されて歩むことができる。もちろん私たちはここから、その人の外見的な若々しさや健康状態から、その人の信仰の度合いを逆算できるかのように考えるはならないでしょう。若々しく健康な人は信仰の立派な人で、反対に病弱でふけている人は不信仰な人であるかのように。もしそうだとしたら、正しい信仰に生きている人は、いつも若々しく健康であるため、いつまで経っても死ねないことになってしまいます。それはおかしいことです。しかし主に信頼と希望を置き、主を待ち望んで生きる人は、日々新しい力に生きることができると言うのは本当でしょう。カレブはそのような祝福に生きていたのです。そして彼の場合、健康も保たれて、85歳なのに40歳の時と少しも変わらないと言えるほどの霊肉両面に渡る祝福を主から頂いていたのです。

そしてさらに私たちに驚きとチャレンジを与える言葉は12節です。「どうか今、主があの日約束されたこの山地を私に与えてください。あの日、あなたが聞いたように、そこにはアナク人がおり、城壁のある大きな町々があったのです。主が私とともにいてくだされば、主が約束されたように、私は彼らを追い払うことができましょう。」カレブがこの時、前に出て来たのは、ただ安逸を求めるためではありませんでした。85歳の彼はなお主のための戦いに身を投じようとしています。あの45年前と

同じように今も壮健です！との言葉が口先だけではないことを示そうとしています。そして彼が挑もうとしているのは、何とあのアナク人の町へブロン。そのように述べる彼の言葉の中で、彼の信仰を端的に言い表している言葉が、「主が私とともにいてくだされば」という部分でしょう。ここはヘブル語では他の箇所では「たぶん」と訳されている言葉が含まれています。なぜカレブはこのような言い方をしたのでしょうか。「たぶん」などと言わず、「主は私とともにおられるので」と言い切った方がより信仰的ではないか、とある人は思うかもしれません。しかしここにはカレブの注目すべき2つの信仰が示されています。一つは主の主権性を認める信仰です。カレブはこれからの戦いにおいても主に信頼しますが、自分が主で、主なる神様がしもべなのではありません。あくまでも主なる神様が主です。ですから自分が上に立って物事すべてを決定できるような言い方はしていない。主の主権と自由性を認めて、その前にへりくだっているカレブの姿がここに現れています。そしてもう一つここに見られる信仰は、主の前にへりくだりつつ、主に大いなる期待を置く信仰です。「主がともにいてくだされば」という言葉によって、カレブは主を計算に入れてこれからのことを考えています。自分ひとりの力では勝つことは難しいかもしれない。いくら壮健と言っても相手はアナク人です。しかし「主がともにいてくだされば」！この視点で彼は状況を見つめ直しているのです。そしてこれがカレブの素晴らしい点でしょう。かつてのカデシュ・バルネアの時も同じです。主が共にいてくだされば、目の前の状況はどう違って来るか、どのように今の課題を捉え直すことができるか、という視点ですべてを計算し直す。そして御前にへりくだりつつ、主の恵みと全能の力に対する大いなる信頼と期待をもって、前に置かれている戦いに取り組もうとする。

そこでヨシュアはカレブを祝福し、ヘブロンを相続地として与えました。そしてカレブはその町に出て行ってその町を自分のものとして取ります。このようなカレブの物語はなぜこのヨルダン川西側の相続地割り当てに関する記事の最初に来ているのでしょうか。それはこれから土地を割り当てられる部族の模範としてではないでしょうか。イスラエルの各部族が割り当て地を持つのは、彼らがそこに住むことによって、さらにその支配を徹底させて行くためです。大まかな支配はすでにヨシュア記12章までにおいて手に入れましたが、細かい部分においてはまだまだ占領すべき地があります。そのような使命をもってこれから土地を割り当てられる部族にとっての模範がこのカレブなのです。

私たちはどうでしょうか。目の前にある状況を見つめて、意気消沈していることはないでしょうか。自分の力のなさばかり見つめてため息をつく毎日を送っていないでしょうか。そんな私たちにとってもこのカレブは模範です。すなわち「主がともにいてくだされば」という信仰をもって、すべての問題を見て行く。主を抜きで考えるのではなく、主を考慮に入れてすべてを考えて行く。そうするなら、私たちの前にはあらゆる可能性が開けていることに気づかされるのではないのでしょうか。私たちそれぞれが主から与えられている使命を遂行していくことにおいても、様々な課題・難題があるでしょう。その時、「主がともにいてくだされば」どう違うか、と考える。そして主に信頼し、主に心から期待している者として、主の御言葉に従う生活をして行く。その時、私たちも力ある歩みをするのが可能になるのです。85歳になってもなおアナク人に立ち向かえるという主の不思議に生きることができるのです。私たちもカレブの信仰を自分の信仰として持つことによって、日々新たな力に満たされて歩む者でありたいと思います。「主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」そして主の恵みに支えられて、自分に課せられた戦いを主と共に戦い、勝利することができる祝福の歩みへ導かれて行きたいと思います。